

イトウ

イトウ (学名: *Hucho perryi*) は、日本の淡水魚では最大の種です。イトウは、かつては東北地方北部にも生息していました。しかし、その数は減少しており、現在日本国内では北海道でのみ見られます。

貴重な資源

北海道の先住民であるアイヌは、イトウを獲って食料にし、その丈夫な皮を使って履物を作りました。この 40 年間、イトウの数は、乱獲および生息地が失われたことで徐々に減っており、絶滅寸前だと考えられています。

長命な魚

イトウは、最大で 20 年ほど生きることができます。イトウは、死ぬ前に 1 回だけ産卵するほとんどのサケ科の魚と異なり、一生のうちに何回か産卵します。イトウの成魚は、通常、落ち着いた茶色に細かな斑点がある姿ですが、産卵期のオスは赤くなります。

イトウの成魚は体長 1m ほどに達するのが一般的ですが、知られている最大の例としては、北海道で 2.1m のものが捕獲されたという記録があります。イトウは、釧路湿原の食物連鎖の頂点にいます。若いイトウは主に水生昆虫を食べますが、成魚になると、他の魚、カエル、ネズミ、ヘビなど、より大きな動物を周りで見つけて食料にします。